

**310**

## 脳動脈瘤術後の脳血流シンチグラフィ

小川洋二、木下博史、林 邦昭（長崎大学放射線科）  
脳動脈瘤術後29例（破裂22例、非破裂7例）の脳血流評価のために、のべ38回の脳血流シンチグラフィ（IMP30回、HM-PA08回）を施行し、術後のCT、血管造影所見や予後と対比した。IMP-SPECTでは持続動脈採血による局所脳血流測定も行った。破裂例のSPECT所見は、正常（I群、8例）、全体的な血流低下（II群、5例）、局所的血流低下（III群、9例）に分類した。I群ではCTの異常はなかったが、3例（38%）にspasmを認めた。II群ではCT異常は1例のみであったが、3例（60%）にspasmを認め、4例（80%）が神経症状を呈した。III群の7例（78%）にCT異常が出現し、CT異常のなかった2例を含め6例（67%）にNPHのためにVPshuntが施行された。非破裂例では、spasmは生じなかったが、3例（43%）に血流異常が出現し、うち2例に神経症状が出現した。SPECT所見は脳動脈瘤術後の脳血流評価に有用であった。

**311**

## 大脳深部血管障害における皮質脳血流低下

羽生春夫、浅野哲一、阿部晋衛、新井久之、高崎 優（東京医科大学老年科）、鈴木孝成、阿部公彦、網野 三郎（東京医科大学放射線科）

一側大脳深部領域に局限した脳血管障害例を対象に、皮質領域の脳血流量をIMP-SPECTを用い評価した。血管病変を認めないlacunar梗塞の一部でも軽度の病側皮質血流低下がみられたが、主幹脳動脈の閉塞性病変による深部梗塞ではより広範かつ高度な皮質血流低下がみられ、病態の相違が示唆された。また出血例についても、病巣の局在と範囲により皮質血流低下がみられることは少なくなかった。これらの中で高度な皮質血流低下がみられた症例では、失語や失認等の神経心理症状が観察され、病巣局所の他に遠隔部位の病態についても考慮する必要があると考えられた。